



その日その夜

永代美知代

〔64〕 「知らないく、何だつて私、こんな日に熱なんぞ出るんだらう！」

萬壽子は母様や、大兄様や、姉様や、皆なを送り出すと、もう落膽して、部屋に歸るなりべつたりふくれ、倒れるやうに坐つた。溜め溜めた涙がみえも無い襦袢と、淡紅色つぼい友禪の着と紫じみた着物と、色彩美しく重なつた重い袂に受け、そしてガツクリ、そのまゝ机の上に打伏した。

「萬壽子姉様、何してるの？」

六つになる姪の鈴子が、これもやつぱり母様に置いて行かれた淋しさに、そつと障子を開けて入つて来た。

「お頭きい〜？」

傍へよつて訊いても返事がない、鈴子は不安げに姉様のお顔を覗いた。

「泣いてるの？」

「うそよ、泣いてやしないわ。」

斯う云つて顔をあげてやりたいけれど、生憎に涙が湧いて、萬壽子は矢張そのまゝに黙りこくつた。

「姉様御門の外へ出て見ませうよ、お家にばかり居て私つまらないわ。」

「駄目、姉様は駄目、熱があるから外へ出ちやいけないですつて。」

やつとの事で泣きやんだ萬壽子は、涙にてらつく顔を俯向けがちに、

「だからあなたは宮やと一緒に、一人で出かけてらつしやいね。」

「萬壽子姉様、姉様は外へ出られないから泣いてるの？」

「えいさうよ。」
思はず莞爾させられた。

「きい〜悪くて可哀さうね。」

「鈴ちやんはきい悪い悪くないのね、だから宮やと一緒に出掛てらつしやいな。」

「えい、すぐ歸るか待つて、頂戴。」
鈴ちやんが出て行くくと、萬壽子は又一人で焦立たしい氣持になつた。

「何だつて、何だつてこんな日に熱なんぞ出るんだらう！」



自分ではもつ、とつくの昔に快くなつたつもりで居るのだけれど、毎日診に来るお医者様の忠告で、

病床を上げてから四五日も、風邪の後を學校に出ないで居るのであつた。それが今日は朝から熱が出て、萬壽子は絶対に外出を許されない事になつてしまつた。

「ナアニ、ふだんなら何でも無い。」

「學校なんて少し位やすんだつて、試験の時出来るへすりや澤山だわ」といふ主義で居る萬壽子の事だから、何も泣いたり焦れたりするんぢやない、が今日は特別、二年

「如何したの？ 泣き蟲だな此奴は！」
 「だつて、だつて嬉しいんだもの三ちゃん。」
 「オイよせよ、三ちゃんなんて、憚りながらこれでも兄貴だぞ、ハツ／＼。」
 「もう知らない！」
 思ひ切りすねたつもりでも、どうも口元が笑ひ度がつて承知しない。萬壽子は恵比壽様が怒つたと云つた容子で、白い眼をむいた。



「おゝ此處に居た、三ちゃん、お前はお湯におはいりよ、大兄様はお前を先に入れろつて。」
 母様が莞爾もので入つてらつした。
 「有り難う、ちやあ話はゆつくり、ねえ萬壽ちゃん。」

「知らないわ。」
 「何をまあ、もう喧嘩かえ。」
 「久し振りにね、眞似事をやつたのです。」
 「ホ、ホ、のんきだねえ。」
 「ちや一寸と失敬！」
 大股にノツサ、ノツサと歩いて行く後姿を見て居ると、萬壽子は直ぐその跡を追つて行かうとした。と一緒に「まあちゃん、私達の留守の間よりださうだが、苦しかつたのかい、又熱でも出たんぢやないかねえ。」
 母様は手を差し延べて、心持はてつた萬壽子の額をお撫でになつた。
 「苦しかなかつたわ、だけでも口惜しくつて泣いた

も待ち暮らし、云ひ暮らした大事の／＼その日から堪らない。
 商船の練習船大成丸が、殆んど二年振りに品川へ入つて来る――
 母様も嫂様も、四谷の伯母様達まで御一緒に、大成丸を出迎へて、誰よりも萬壽子と仲が好い筈の三兄様にお出逢ひなさる。
 それなのに……萬壽子は熱があるだの何だのと、つまらない事を云ひ出したお医者様が憎らしくなつた。
 「もう／＼こんどから診てなんぞ貰はないから可い」と人と人を酷めなさいだ！」
 萬壽子は立つて電鈴を押さうとした、だがそのまゝまよして、ぐん／＼自分で寢床を敷いた。
 暫らく絶つて、細目に障子を開けた小間使は、
 「オヤ、いつのまにお休み遊ばして？ 甚くお苦しくつてらつしやいますか。」
 云ひながら傍へ寄りさうにする。

「可いから来ないで頂戴！」
 萬壽子は周章て、手を振つた。
 「私些少も熱なんぞありやしないわ。」
 「は？」
 「熱なんぞ無いつて云ふんだわよ。」
 「御用があまり遊ばしたら何時でもどうぞ。」
 静かに閉めて小間使が彼方へ行き過ぎると、萬壽子はすつぽりと夜着の中に顔を埋めて泣いた。
 「オイ萬壽ちゃん、どうした？ 相變らず弱蟲だね。」
 「アラ！ アラ！ アラ！」
 云ひながら目を開いた萬壽子は、いつの間にかついてゐた電燈の光をまぶしがりながら夢のやうな、現のやうな、えたいの解らない氣持になつて、ちつと三兄様のお顔を見守つた。
 輕快な、如何にも船員にふさはしい性質から身装から、萬壽子は懐かしさに取り絶つたまゝ泣いた。

「のよ、でもねえ、もう直つたわ。」
云ひ捨て、摺り抜けるやうに廊下を走つた。

「兄さん、一寸と三兄さんてば！」

呼び掛けても三兄さんは聞えないかして、頻りに
パケツで以て湯舟の中のお湯を汲み出して居る。

「兄さんてば、お土産は何に？」

やつと氣がついて振り返つた。立ち昇る暖かい湯
氣の中から、

「お土産？ さうく君は寝てたんだね、座敷へ行
つて見玉へ、色んな物品が一杯ならんぞらア。」

萬壽子は大急ぎで座敷へ駆けつけた。

「如何した？ 病氣は？」

口髭を捻りながら頻りに何かに見入つてらつしつ
た大兄様が、斯う萬壽子をお迎へになつた。

「それ何ですの？」

「これはトツカンチンキだとさ、南洋の土人の造つ
た舟だとさ、まあ香氣をかいで見い、原料は丁字だ
よ。」

「まあね。」

手に取つて萬壽子は驚ろいた、南洋の土人と云へ
ば、直ぐに野蠻な人種を連想せずには居られない。

それなのに、文明人の手に成つたと云つても差支な
い程手細工は精巧なものである。

椰子の實で造つた菓子器だの、何とか變な名前の
ありさうな豆のメタルだの、色んな不思議なものが
ある。

「大兄様、駄鳥の玉子は？」

それを教へられたのは、案外小さな兩方の手の
中

に持たれる位の大きさしかなかつた。

「だけども船員で愉快な者だねえ。」

「え、船員の家族も幸福ね。」

「いろんな土産を貰へるからね。」

「アラ、そんな事ばかりぢやないわ。」

斯う云つた萬壽子は、其處らに取り散らされてあ
るダイヤやルビーの指環や、赤い小さな玉の頸輪
を見廻して胸を踊らせた。